

「ふれあい」と「自他発見」 ー入学直後の大学生に対する「出会い」のワークの実践ー

杉 山 雅 宏

1. はじめに

筆者は心理学の講義を担当するかたわら、学校カウンセリング業務を兼任している。学校カウンセリング業務を通じて最近の学生の課題がみえてくる。「薬剤師の資格は就職にも有利で安定している」「就職が安定しているからと高校の先生に勧められた」など、資格取得という視点を重視して気軽に入学する学生が増加した。学習に対する動機づけが希薄なため、困難な場面で息切れする可能性がある。「家で薬局を経営しているから」、「祖父の代からこの大学で学んでいるから」、「親の果たせなかった夢をかなえてほしい」、「親が医療人になることを強く望んでいる」など、家族の大きな期待を背負って入学する学生も多い。自己決定に基づかず入学した学生は、人生は自分自身のためのものであるという意識が希薄である。さらに、「メンタル系の薬をのむと依存が強くなるから飲むなと家族から言われている」、「医療に立つ人間が心療内科などを受診してはいけない」など、医療側に立つことにこだわる学生の中には自分が受診することに抵抗を示すものが多い。最近、多く聴く声としては、「一度グループから抜けると、他のメンバーは受け入れてくれない。抜けたくても抜けられない。他のグループに今更入れてくれとは言えない」など、講義等の学生生活がクラス単位で動くことが中心になるため人間関係のトラブルが誘因となりメンタル不調に陥る学生もいる。このように、数え上げると枚挙にいとまがない。

特に心配になるのは、「サークルに入る目的は、試験に関する情報を得

るため」、「自分よりも成績のいいクラスの仲間には、絶対に過去問情報を渡したくない」、「自習室のごみの処理、それは清掃業者の人たちの仕事でしょ」など、学習ストレスに起因するとはいえ、あまり口にしてほしくない発言もときには聞こえてくることである。

医療の現場では確実に、目の前にいる患者さんは自分たちよりも苦しい立場にある。そうした人たちの気持ちを、「わかろうとする」ためには、自分さえよければという対人関係の構えは好ましくない。日ごろより、生活を共にする身近な仲間へ生への意欲を与えることのできるような人間関係調整能力を身につけさせる必要性を痛感している。日常生活でできないことは、仕事の場面でもできないからである。

国家試験合格という6年後のゴールは皆同じである。そうであるならば、「私は、今日はあなたを助ける人ですが、明日はあなたに助けてもらうかもしれない人間です」という、助けたり、助けられたりのカウンセリング、いわゆる、ピア・カウンセリングが学生間で展開できるきっかけを、入学直後に仕掛ける必要性を痛感している。

本稿では、本学で入学式翌日に実施している、新入生オリエンテーションの1コマ、「新入生交流会」における人間関係づくりの実践を紹介する。この新入生交流会は、新入生がクラスの仲間や担任との交流を図る中で、彼らの緊張をほぐし、不安を解消することを第一義的ねらいとしている。方法は、「ふれあい」と「自他発見」を目標とした構成的グループエンカウンターの手法を活用し、「自由歩行」「バースディライン」「質問じゃんけん」「他己紹介」など、誰でも気軽に楽しめるエクササイズを童心に返り味わい、気づいたことを互いに語りあう「振り返り」を体験し、学生同士、担任－学生間の交流を促進するものである。また、「大学生になってやりたいことベスト5」というオリジナルのエクササイズも実施し、単に学生間の交流を深めるだけでなく、自由な雰囲気の中で、学生の悩みをさ

りげなく自己開示させる取り組みも実践している。

学生の人付き合いは、表面的にはうまくやっているように見える。見かけは仲良しでも、あたらずさわらずのつきあいが展開されれば、慢性の孤立感が漂う。本当の自分が何を感じているのか、何を考えている人間なのか、自分で自分のことがわからなくなる、自己疎外の状態に陥っている。仲間同士の雑談の場を提供し、本音を語るということがどういうことなのかを、入学直後に体験することで、後の人間関係づくりに多少なりにも役立てたいと思い、出会いのワークを実践することにした。

2. ふれあい体験の減少

「子ども孤の時代」（朝日新聞，2007年3月5日）と称されるように、若者たちの多くは、ふれあいのある人間関係体験を十分に経ずして、大学に入学してくる。片野（2009）は、不登校やいじめといった問題に代表されるような、非社会的・反社会的問題行動は年々増加してきているが、その多くはリレーション（ふれあい）形成や分離不安克服のあがきが原因であるという。

ふれあいは安全基地の役割を果たし、問題行動の抑止力、分離不安に耐える力となる。人生は、一時または一時期という時間の長短はあるものの、別れという分離不安の連続である。ふれあい体験の不足を学校教育の場で補う必要性があり、すでに、小中学校の現場では、児童生徒のよりよい人間関係構築に向け、構成的グループエンカウンターの実践が盛んに行われている（近藤，2013）。

構成的グループエンカウンターは、心理的な課題であるエクササイズの体験と事後の仲間同士のシェアリング（振り返り、分かち合い）を通して、集団内のリレーション及び個々の自己発見を促進することを目指す、集団カウンセリングの一技法である。「構成的」の名前が示す通り、リーダー

が時間、人数、課題等の「枠」を提示しながらグループ活動を展開することから、時間割に沿って日常生活が流れる学校現場には馴染みやすく、教師が使えるカウンセリング技法としても注目度は高い。

人間の成長の根源は、親と子の1対1のふれあい（特に、母子関係）から始まる。学童期になると、親とのふれあいが徐々に仲間とのふれあいに移行していく。ふれあいが拡大するのである。やがて、社会にまで発展し、社会の中で何らかの役割を演じることにより、社会とのリレーションを形成する。つまり、人が成長するとは、1対1のふれあいからグループ内でのふれあいに対象が拡大していくのである。

学校現場に構成的グループエンカウンターを導入するということは、人工的・契約的グループの中で本音の自分を発見し、それにしがって生きる練習をする場を設定するということである。

3. なぜふれあいが必要なのか

(1) 自他受容をもたらす

人は、本音を話しているとき、それを好意の念をもって真剣に聴いてもらえると、話し手は嬉しくなる。落ち込んでいるときの自分を語っている場合や、惨めな体験談を話しているときはなおさらである。人生七転び八起きとはよく言ったもので、生きている限り人は様々な苦難に遭遇する。

そのようなとき、人は話を聴いてもらえるだけで自然と勇気づけられる。つまり、勇気づけられるというのは、人に話を聴いてもらえた行為ともいえる。「私は受け入れてもらうに値する人間なのだ。こんな私でも、人に受け入れられた」と思えるようになるのである。

こうした体験を積み重ねることで、徐々に自己肯定感が高まってくる。そして、聴いてくれた相手に対して、好意の念を抱くようになり、聴いてくれた相手を受容するようになる。

（２）人を我慢強くする

人は必然的に、ふれあっている相手が窮地に陥れば、その相手に向けて応援メッセージを送りたくなる。自然に相手の役に立ちたいという感情が沸き起こるものである。ふれあいは、後でよいことが起こるかもしれないという条件付きのものではない。ふれあいは、同じ境遇にあるもの同士が互いに助け合うことである。それは、ふれあっている相手が、自分にとってかけがえのない存在だからである。だから、ふれあっている相手から、サポート的な態度や行動を向けられると、人は我慢強くなり、もう少し頑張れるかなという気持ちになる。

（３）自己肯定感を高めよう

人を受容するということは条件付きではない。相手の欠点・短所のすべてを丸ごと包み込むという意味での無条件の受容である。つまり、日ごろの生活態度や能力・成績などには関係なくすべてが受け入れられる。人は、無条件で丸ごと包み込まれれば、「自分のような至らない人間でも受け入れてもらえる」「勉強が苦手で、特に人よりすぐれているわけでもない自分でも人に受け入れてもらうことができる」と思えるようになる。

人は無条件に受容してもらえると、自分の全体のごく一部の側面、すなわち、勉強が苦手である、人よりすぐれているわけではないなどというネガティブな部分への意識が薄れてくる。すなわち、自分のネガティブな側面に向けられていた心のとらわれから解放されるため、自己肯定感は回復される。

４．ふれあいを楽しむきっかけを作る

多くの学生は、他人から変わった人だと思われたくないばかりに、気がねや遠慮、緊張、防衛があって自分の考えを主張したりせず、多くの意見

に合わせることがしばしばある。他人の意見に反対もしないが、自分の考えを反対されることも好まない、反対されると不快に感じるという傾向をもっている。こういう間柄で、学生は緊張や苦痛ばかりでなく、戸惑いや困難、心理的な苦痛を日々感じている。

人間関係にはいくつものレベルがあり、親友のレベルばかりではない。会えば挨拶をする程度のレベルから、話しかけられれば社交会話をするという当たり障りのないレベル、仕事上のつきあい、上司と部下、同僚関係などのレベルもある。学生の人間関係にもこのようなレベルがあり、これからの学生はレベルにあった対応ができなければならない。親密な関係のみが人間関係と考えている場合、挨拶する程度や社交会話を交わす程度の人間関係に対して、学生は戸惑いを隠せない。近時、学生はクラスの中に5～6人の小集団をいくつも作り、いつも小さな島宇宙の中で、気を遣いながら人間関係を維持しているため、挨拶をする程度の人間関係は案外苦手である。しかし、このような人間関係は、いつでもどこにでもあり、一生付きまとうものである。だから、それなりの関係づくりや関係を保つスキルをもっていないと、生きていくうえで困難を感じるようになる。こうしたスキルは、気をつけていれば自然に身につくものであるというのが、これまでの多くの親や教師の認識であった。しかし、大人が想像している以上に、若者のふれあい体験は乏しいものとなっているという現実を直視すべきである。

入学して間もなく、教室に入れない女子学生が涙して語った。「今、クラスに行こうとするととても気が重く憂鬱になります。今の自分は、このクラスでやっていける自信がありません。高校時代の親友に相談したら、気持ちを理解してくれたため、涙が止まりませんでした」

後期になって間もなく、ある男子学生がこんな相談をもちかけてきた。「あっという間に前期が終わってしまいました。入学後、僕は友だち作り

に出遅れてしまいました。すでにグループができていて、出遅れた僕が入っていきけるようなグループはもうありません。友だちのできないクラスなんて居場所がなくて、講義に出るのも辛くて。今まで、高校時代の友だちに愚痴を聴いてもらっていたのですが……」

これらの学生は、明らかに内心に分離不安を感じていたのである。グループ内でのふれあいを楽しめず、いつまでも1対1のふれあいに固着しているのである。レベルにあった関係づくりや、関係を保つスキルをもっていると、学生の生活はもう少しスムーズになる。学生の人間関係の広がりをもっと豊かなものになるだろう。

エンカウンターは「出会い」という意味である。「出会い」とは縁を大事にした人とのふれあいである。学生は学校という場で今日に至るまで、色々な人と出会ってきた。学校という場を介しての出会いは、地縁である。多くの場合、この出会いは偶然の出会いである。学校で出会い、知り合い、仲良くなり、親友になっていくものもある。また、卒業により、それぞれの進路に進むことで、一生、出会うことのない間柄になってしまうこともある。それが人生というものである。

このように、人の縁とは不思議なものである。だから、せっかく得た縁は大切にしたいものである。知り合い、仲良くなり、親友の間柄になる関係は、他者を知る過程である。同時に、自分を知ってもらう過程でもある。知り合うようになると、自然に相手に対して興味・関心がわく。もっと相手のことを知りたいという欲求にかられる。知ることが好意にかわったり、友情にかわったり、ときには愛にかわったりすることもある。

人は、出会いふれあうことで、人の考え方・受け止め方・見方に触れる。人の言動を見ながら自分を見つめるのである。さらに、ふれあうことでメンバー間に感情交流が起きる。これらを通して、メンバーは新しい感情体験、新しい認知の学習、新しい行動を学習し、生活空間を広げられるよう

になる。大学生になれば、慣れ親しんだ地元を離れ、ひとり暮らしを始めるものもある。そこで、交友関係の範囲も、今までの狭い地域社会という限定された結びつきから、自分とは異なる生活環境で育った人との出会いに拡大する。この出会いにより、人は育てられるのである。グループは個人を育てるという視点を忘れることなく、ふれあいを楽しむきっかけづくりに尽力すべきであろう。

5. 新入生交流会の目的

新入生交流会の目的は、以下の3つである。

- 1) 新入生が、クラスの仲間や担任との交流を図る中で、彼らの緊張をほぐし、不安を解消することを第一義的ねらいとする。
- 2) 学生参加型のワークショップを実施し、これからの大学生活の主人公としての自覚を促し、大学生活全般の動機づけの一助とする。
- 3) 身近な仲間へ生への意欲を与えることのできるようなコミュニケーション能力を身につけさせる。

方法は、「ふれあい」と「自他発見」を目標とした構成的グループエンカウンターの手法を活用する。構成的グループエンカウンターは、「時間」・「メンバーの数」等制限された枠の中で、各自与えられた「課題」に主体的に取り組む。そして、課題を通じて感じたこと、気づいたことを語り合う「ふりかえり」によるふれあい体験を通じ、学生同士・担任—学生間の交流促進を図る本音と本音の交流を目指すグループカウンセリングの一種である。

心と心が通い合う「私」と「あなた」との人間関係をさりげなく体験させることで、相手の身になり考え、お互いが固有の存在であることを認めあえるふれあい体験を味わう。

6. 構 成

ワークショップは3部構成となっている。

ワークショップ1は筆者が担当する。講義の枠組みを意識した2クラス単位のワークショップである。講義を共にする仲間同士の交流を目指す。

ワークショップ2はクラス担任が担当する。クラス単位の枠組みでの実施とする。クラス内での小グループディスカッションによる交流促進、後の担任との面談に役立つ情報収集等を意識したワークショップである。

ワークショップ3は学生主催で実施する。立食パーティーの場で実施するワークショップである。ゲーム感覚で参加し、クラスの仲間とのコミュニケーションを促進する。

(1) ワークショップ1について

ワークショップ1は、自由歩行（ウォーミングアップ）、バースディライン（非言語によるコミュニケーション）、質問じゃんけん（2人1組のコミュニケーション）、他己紹介（4人1組のコミュニケーション）から構成される。

「自由歩行」は、ひとり旅をする感覚で、無言で自分の歩きたいように空間を歩き回る。時間を1分とし、「すれ違った人を無視する」「目と目だけで挨拶をする」「“こんにちは”と声を出して挨拶をする」など課題を与え、「不自然だ」「緊張する」「照れくさい」などの感情にひたりながら歩く。

「バースディライン」は、非言語のコミュニケーションを体験する課題である。各クラス（約50人）、担任教師を基準に、1月1日から12月31日までの誕生日順に円を作り並び直す。その際、一切しゃべってはいけないため、コミュニケーション手段はジェスチャーとしての非言語のみを活用する。無邪気な子ども心を丸出しにして、雰囲気を作るのが目的である。

「質問じゃんけん」は、2人1組でじゃんけんをして、勝った人が負け

た人に1問だけ質問し、2分経ったらパートナーを交換するという自己紹介ワークである。友だちの話を聴き、自分のことを話すことで、友だち同士が肯定的に認めあえる雰囲気作りをし、交流の促進を図る課題である。

「他己紹介」は、2人1組のペア同士で、4人1組を作り、新しい2人にそれぞれのパートナーを紹介しあうという課題。パートナーについて知れたことをもとに、気持ちをこめて紹介するようにする。他者理解を促進し、交友関係の輪を広げることを目的とする。

なお、ワークショップ1では入学式直後であるということ、大学生独特の心性を考慮し、握手などのスキンシップを伴う課題を避け、気兼ねなく学生同士がふれあえるように配慮した。

(2) ワークショップ2について

ワークショップ2は「大学生になってやりたいことベスト5」というオリジナルのワークである。クラス単位で実施し、担任がファシリテーターを務める。

まず、ブレインストーミング形式で「大学生になってやりたいこと」を思いつくままに書き出す。次に、書き出した内容を吟味し、そこから5つだけ選び、やりたい順に並び替える。5つの選びだしたものをじっくりながめ、卒業後（4年後または6年後）、どんな自分になっていたいか、思いつくことワークシートにまとめ、グループのメンバーに自己開示する。グループは4人から6人程度とする。その他、大学生生活を送る上で、不安に思っていること、心配なことがあればシートに記入し、事後の担任面談の資料とする。

このワークショップは、担任が実施するため、運用マニュアルを作成し、事前に研修も行うようにした。

(3) ワークショップ3について

自由に室内を歩き回って、できるだけたくさんの人からサインをもらう

ワークである。出会った人とジャンケンをして、勝ったら相手のシート（大きな四角と小さな四角がいくつもあるシート）の大きな四角の欄に、負けた人は、相手のノートの小さな四角の欄に、自分の名前を全部「ひらがな」でサインをする。ジャンケンに勝っても負けても、サインをもらったら自分なりにお礼の言葉や動作をする。そのとき、よく相手の顔と名前を見る。

7. 学生・教員の反応

（1）学生課のアンケート結果

学生課で実施したアンケート（26年度実施分）では、「ワークショップ1」については、とてもよかった・よかったが88%、「ワークショップ2」では、とてもよかった・よかったが75%と、概ね良好な結果であった。

（2）クラス担任の反応

一部ではあるが、クラス担任からの声を紹介する。

- ・「担任が介入することなく、早期にグループが形成された（担任としては少し気が楽になった）」
- ・「学生間の距離がぐっと縮まった感じが、学生の動きを見てわかった」
- ・「気軽に小グループが出来上がり、そこから仲間が増える（グループの拡大）までの時間が短縮されたように感じた」
- ・「学生のフットワークが軽くなった」
- ・「“大学生になってやりたいことベスト5”の資料は実際面接で活用したわけではないが、入学時の不安は資料として活用している」
- ・「“入学時は〇〇だった”と書かせることにより、振り返りが可能になり、後の面接に活用できる」

8. 考 察

(1) ふれあいの必要性について

本学の学生は、「勉強についていけるか」「単位がとれるか」「進級できるか」「留年しないだろうか」という、「学習不安」を入学早々に抱えている。ワークショップ2「大学生になってやりたいことベスト5」の「大学生活を送る上で、不安に思っていること、心配なこと」の46%は「学習不安」である（杉山，2013）。こうした不安を抱いた学生同士が、話し相手になり、いわゆる、ピア・カウンセリングが学生間で自然に展開できるきっかけを、入学直後に仕掛ける必要があることを痛感する。友だちにノートを貸す、ぼつんとしている人に声をかけることなどが自然にできるようになって欲しいと思う。

「質問じゃんけん」は、自分から話せない学生や人間関係づくりが苦手な学生でも、ゲーム感覚で抵抗なく友だちと交流ができる。入学直後の緊張をほぐし、楽しい雰囲気を作ることが可能である。

教示する際の配慮として、「自分が質問されたら答えにくいような質問はしないこと」「聞かれたら嬉しくなるような質問を心がけること」という介入を事前にした。そして、上級学年であるボランティアの学生スタッフに、デモンストレーションを実施してもらった。こうした配慮をすることで、新入生は出会った仲間に配慮をしつつ、リラックスした雰囲気の中で、ふれあい体験を味わうことができたと考えられる。また、ボランティアスタッフにとっては、緊張しつつも活躍の場を与えられることで、達成感を味わうことができる。

「はじめは、じゃんけんなんて幼いと思いましたが、やっているうちに夢中になってしまいました」「1問1答方式だから、気楽に取り組める」「短い時間だから、仲間の話を集中して聴くことができた」「色々な友だちと童心に帰り気軽にふれあうことができた」「誰でも簡単に取り組めるか

ら、抵抗感がない」など、学生の反応は、概ね良好であった。

(2) 自他理解

ふれあいによって人は、今まで気づくことができなかった自分に気づくことができる。そして、他者とふれあうことにより、相手のことが深くわかるようになる。ふれあいとは、「本音と本音で交流すること」であり、自他発見とは、ふれあいを通して自他のかけがえのなさを確認し合う一方で、自己盲点に気づくことである。

ワークショップ1では、誰でも簡単にできるじゃんけんという手法でふれあい、「自己紹介」を促す課題で「自己開示」を無意識に体験することを試みた。ここで、十分なふれあいを体験することで、ワークショップ2に橋渡しすることができた。

ワークショップ2では、グループのサイズを拡大し、さらなる自己開示を促すワークである。自己開示しあうとは、複数の人間が1つの世界を共有することであり、個々は共有の世界の中での個であることを宣言することである。つまり、これこそ、人間の原点にふれることである。自己開示の意義は、人のつながりの中にいる自分を実感することで、人生を肯定的に生きる源泉ともいえる。

「音楽系のサークルに入りたい」「規則正しい生活をしたい」「アルバイトをしてみたい」「温泉など旅行がしたい」「海外に行ってみたい」「ライブに行きたい」「語学の勉強がしたい」「仲の良い先輩を作りたい」「髪の毛を染めてみたい」「自動車運転免許を取得したい」「ボランティア活動がしたい」「料理ができるようになりたい」など、ふだん言わないようなことを仲間に話したくなったり、自分の気持ちを素直に相手に話したりする場を提供することができた。

「同じ目標を持って大学に来ているのに、やりたいことはみんな違う」「自分とはまったく感覚の違う人がたくさんいて驚いた」「勉強以外のこと

にも興味があるのは、自分だけではなく安心した」「自分の考えていることを聴いてもらえただけでも安心した」「あらためて、自分が案外真面目であることに気づいた」など、学生相互の交流で、自己理解・他者理解は深まった手ごたえを得ることができた。

(3) 「学生同士の学びあいの場の提供」の布石

発展的な話題であるが、学生をより能動的に学習させる講義を今後展開していくためには、学生同士が学びあう対話中心の講義を展開することが有効であると考ええる。学生を孤立させることなく、学生同士を繋げ、学生同士が互いに学びあえる場を演出することが大切である。そのためには、入学後早い段階で、学生同士がふれあうことが望ましい。

河地（2005）は、授業改善に対する学生の意識調査から「教員が学生と授業外でもコミュニケーションをとる」、「討論・プレゼンを含めた学生参加型の授業にする」等の要望が約8割の学生から示されたことに伴い、「教員が一方的に話し、学生はノートをとるという形式ではなく、学生が発言し、質問し、自分の考えを形作っていく授業にする」、いわゆる参加型授業に向けた提言を行っている。教員は、「学生に基礎学力がない」「学習意欲がない」等学生の問題点のみを指摘しがちである。しかし、河地の調査によれば、54%の学生は「授業・ゼミ」、「資格取得のための勉強」に重点をおいて学生生活を送っていると答えている。つまり、学生はもっと勉強したいと思っているのである。まして、最近の学生は、小学校のころから、「自分と異なる考えに触れる」、「仲間同士のコミュニケーションが自然にとれる」などの構成的グループエンカウンターを活用した授業をすでに体験してきている。また、大学における参加型授業実践が、学生の高い評価を受けてきている（杉江，2000；南，2002）という事実も見逃すことはできない。今後の大学の授業改善に向けた1つの示唆になるのではないだろうか。

9. 今後の課題

(1) 薬学部に入學したばかりの学生にとって、入學直後は新たな環境と生活に馴染むとともに、新たな仲間を形成していくべき時期でもある。薬学部学生は6年間の学生生活での学内実習（1年次より実施）、5年次に実施される病院実習、薬局実習、課題解決型学習（PBL）などで、仲間との研鑽を通じて成長する部分が大きく、こうした仲間は薬剤師としての自己成長に大きな影響を及ぼす。仲間は、自己のエンパワメントを促進する存在であると考えられるため、よりよい人間関係を構築することが重要となる。

最近では薬局や病院で薬剤師は患者に服薬指導を行うのが当たり前の光景になっている。つまり、患者との人間関係が基盤となる。ただ、医療者の中でも特に薬剤師は、薬という物質を媒介として患者と向き合うため、どうしても薬の服用方法や副作用についての知識を一方的に患者に教育指導しようとする傾向にあることも否めない。もともと薬剤師と患者との関係は、薬の専門家と素人という立場の違いによる心理的力関係が生じやすく、患者が自分の不安や疑問を言いにくく、受け身で指導を受ける関係になりがちである。薬剤師と患者がコミュニケーションをとる目的は、互いの信頼関係を構築し、患者が抱えている問題点を聴きだし、解決の糸口を専門的な立場から提供することにある。そうでない限り、患者が自ら治療行為に向き合うことはない。こうした視点からも、薬剤師と患者との人間関係構築は不可欠な要因となる。

大学生は青年期後期にあたり、心理発達の課題は自我同一性の形成である（村瀬・近藤，2001）。自我同一性の形成は、時間展望をもてるようになること、自己への達成への期待感、性的同一性の獲得を内包しており（長田，2002）、自己理解を前提としている。同時に、他者の力を借りることにより自己理解は進んでいくため、結果的に他者理解を促すことにもな

る（片野，2003）。つまり、青年期の薬学部学生が自己を深く理解することとは、単に発達課題を乗り越えるということだけでなく、薬剤師にとって必要な他者理解や人間関係作りの土台を構築することにつながると考えられる。

構成的グループエンカウンターは短時間でふれあい、人間関係が構築しやすく、心理的にも安全であるといわれている（國分，1981）。林・石永（2005）は、すでに一般大学生を対象に人間関係作りなどを目的に構成的グループエンカウンターを実施している。医療系では看護教育において早くから演習や合宿形式で導入され（広瀬，1990）、最近では、コミュニケーション論などの演習の一環として実施されている（長田他，2001）。いずれも、構成的グループエンカウンターが大学生の人間関係作りや自己理解促進に有効であることを示している。

本学では、新入生オリエンテーションの1コマ「新入生交流会」で構成的グループエンカウンターの手法を活用した出会いのワークを実践した。今後は、学生が学生会主催の新入生歓迎会等で積極的に取り組む姿勢を示しているため、発展的課題として、ピア・サポート活動の中に組み込んでいく方向性も検討する価値はあると考える。

（2）構成的グループエンカウンターは、準拠集団を作り、エンカウンター体験は人間的成長のビタミン補給ともいえる。準拠集団とは、互いに優しくなれて学びあえる集団で、メンバーの行動基準になる集団である。具体的には、1）リレーションのある（親密な関係がある）集団、2）相手の身になって話を聴き、相手のことを思って話す集団、3）遠慮や気兼ね、防衛をしないで、自己主張・自己表現のできる集団、4）特定の感情、特定の認知、特定の行動から解放される集団のことである。

交流のあるクラスに身をおいた学生たちは、自己開示を通して自己理解や他者理解を繰り返し、そこから生まれる成功や失敗によって成長が可能

となる。それが学生を社会化するということでもある。

大学のあらゆる場面で行われている教育活動の基本は、人と人とがふれあっている以上、リレーションの構築以外のなにものでもない。こうした仕掛けを活発にすることで、教員の学生指導も自ずとしやすくなる。本学はクラス担任制をとっている。幸い、講義や実習もクラス単位の運用となっており、高校や高等専門学校に類似したクラス環境となっている。ただ、担任が毎日クラスの学生の顔をみるような環境にはない。だから、学生が何かに悩み、困ったときに助け合えるような学生間のリレーションを構築し、そうした準拠集団をコントロールできれば、担任の仕事は効率よく運用できる。問題を予防するという観点からも準拠集団作りは喫緊の課題であると考ええる。

<引用文献>

- ・ 林伸一・石永雅子 2005 大学生のための構成的グループエンカウターの展開－日本語学特殊講義における実践研究－ 山口国文 (28) 27－40
- ・ 広瀬寛子 1990 看護学教育における集中的グループ体験のもつ教育的機能に関する研究－現象学的方法を用いて－ 看護研究 23 (5) 57－67
- ・ 片野智治 2003 『構成的グループエンカウター』 駿河台出版 24－27
- ・ 片野智治 2009 『教師のためのエンカウター入門』 図書文化 14－18
- ・ 河地和子 2005 『自信力が学生を変える－大学生意識調査からの提言』 平凡社 90－96
- ・ 國分康孝 1981 エンカウター－心とこころのふれあい 誠信書房 3
- ・ 近藤茂代 2013 構成的グループエンカウターとポジティブ心理学－予防・開発的な教育活動のために－ 創大教育研究 22 109-121
- ・ 南 紀子 2004 実践事例2～共に学びあえる英語学習 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅みなほ(編) 『大学授業を活性化する方法』 玉川大学出版部 86－95
- ・ 村瀬孝雄・近藤邦夫 2001 E. H.エリクソン 『ライフサイクル, その完結』 みすず書房 97
- ・ 長田久雄 2002 『看護学生のための心理学』 医学書院 80

杉山 雅宏

- ・長田京子・松尾典子・古賀美紀 2001 看護学生の対人能力の育成を目指した教育効果 島根医科大学紀要 (24) 21－26
- ・杉山雅宏 2013 学生の“自分心”を鍛える講義実践 東北薬科大学一般教育関係論集27 73－86
- ・杉江修治 2000 学生主体の双方向授業づくり 中京大学教養論集 第40巻第3号 189－198

<付記>

本稿は、平成26年8月27日～28日に帯広畜産大学で開催された、第64回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会において、第3分科会（テーマ：学生の社会性を涵養する教養教育）で話題提供した発表原稿（「ふれあい」と「自他発見」）に、大幅な加筆・修正を加えたものである。